

# 明日香河

## 川淀かはまたさらさらず

## 立つ霧の

# 思ひ過ぐべき 恋にあらなくに

山部赤人 卷三・三二五

私が明日香村の万葉文化館に勤めはじめ、一年半が過ぎました。「万葉集」研究を志してからは毎年のように奈良を訪れ、さまざまな故地を訪ねました。憧れの土地で仕事をするごとの喜びと感動は、今でもまったく変わっていません。

奈良に越してきたのは、初秋の頃です。晴

天の日が続いたある日、夜に雨が降りました。ふとペランダに出てみると、外が一面、霧の海となっている光景に、私は息をのみました。霧の中にじむ家々の電気や信号機の色。普段はっきりと聞こえる踏切や電車の通る音すら、ぼんやりと遠くに聞こえるようにした。奈良に来て初め

やまと  
万葉がたり

て、万葉集を体感した瞬間でした。万葉集に詠まれる「霧」とはことなのだと。

私は仙台市に生まれ、子供の頃に父の転勤で神奈川県に移り住みました。平野で生まれ育った私は、山以外の場所が立ちこめるという光景をほとんど見たことがありませんでした。万葉集には

約80首の歌に「霧」が詠まれており、私にとっては印象的な景物の一つでした。

これらの歌は、霧の立ちやすい大和の風土と、身近な霧の景に特別な思いを込めた古代の人びとの、自然を見つめる目から導かれた

【訳】明日香川の川淀にいつもこめている川霧のように、私の懐古の情は簡単に忘れさるような慕情ではないのに。

のだと気付かされました。朝夕立ちこめる霧を見るたび、万葉びとたちもこの風景を見ていたのだと思うと、心が躍ります。

この歌は、山部赤人が旧都となった飛鳥の美しい風景を詠み、都があった時代を懐かし

古代と現代とでは、気候も生活も感性も変わっているはず。確かにそうかもしれない。でも、そうでないものもきっとあると、私は信じています。

(県立万葉文化館研究員・大谷歩)

む、という内容の長歌に付された反歌です。明日香に立ちこめる「霧」は、赤人にとっては郷愁の景であり、私にとっては万葉びとたちの心を体感する景となりました。

# 君が行く 海辺の宿に 霧立たば

## 吾が立ち嘆く 息と知りませ

作者未詳 卷十五・三五八〇

梅雨の季節になると、職場である明日香村は霧の立つ日が多くなります。霧を見ると、私はこの歌を思い出します。

遣新羅使として新羅に派遣される男性の妻が詠んだと考えられている歌です。「万葉集」の目録によると、派遣は736(天平8)年6月のことと伝えられ

ています。「続日本紀」には該当する記述はありませんが、天平8年に遣新羅使が任命されたことは確認できます。この使節は翌年1月に帰国していますので、7ヶ月を超える派遣であったとみられます。帰路の途中、大使の阿倍継麻呂は疫病で命を落としており、海外への渡航はもちろ

# やまと 万葉がたり

ん古代では国内の旅も、二度と戻れないかもしれない命がけの旅だったのです。

この歌は、遣新羅使人の妻が、出立する夫へ詠んだ別れの歌です。妻の歌に対して夫は、「秋さらば相見むものを何しかも霧に立つべく嘆きしまさむ」(三五八一)、秋になったら会えるのだから

ら、どつして霧に立つように深く嘆かれるのだ、と答えています。

古代では、息が霧や雲になると考えられていました。嘆きの「霧」を通して互いを思いやる、夫婦の愛の歌であると思います。

このような夫婦の愛の歌は、官命によるやむなき別れによって詠まれたものです。日常生活の中で愛の歌を交わし合う夫婦は、古代でもまれでしょう。相手が不在となること、相手と離ればなれになるといふ現実に向き合っている家族や友人たちがいます。この夫婦のような命がけの別離ではありませんが、この歌を見ると、大切に思っている人たちのことを思い出します。

(奈良万葉文化館研究員・大谷 貞)

【訳】あなたが行く海べの宿りに夜霧が立ちこめたら、それは私の嘆きの息だと、お知りください。

大切に気が付くものです。旅の別れは、夫婦や家族への愛を発見する。他の使人たちの歌も、そのような愛と嘆きに満ちています。私も、遠く離れて暮らしている家族や友人たちがいます。この夫婦のような命がけの別離ではありませんが、この歌を見ると、大切に思っている人たちのことを思い出します。